

□非常に重要 ■やや重要 □重要でない

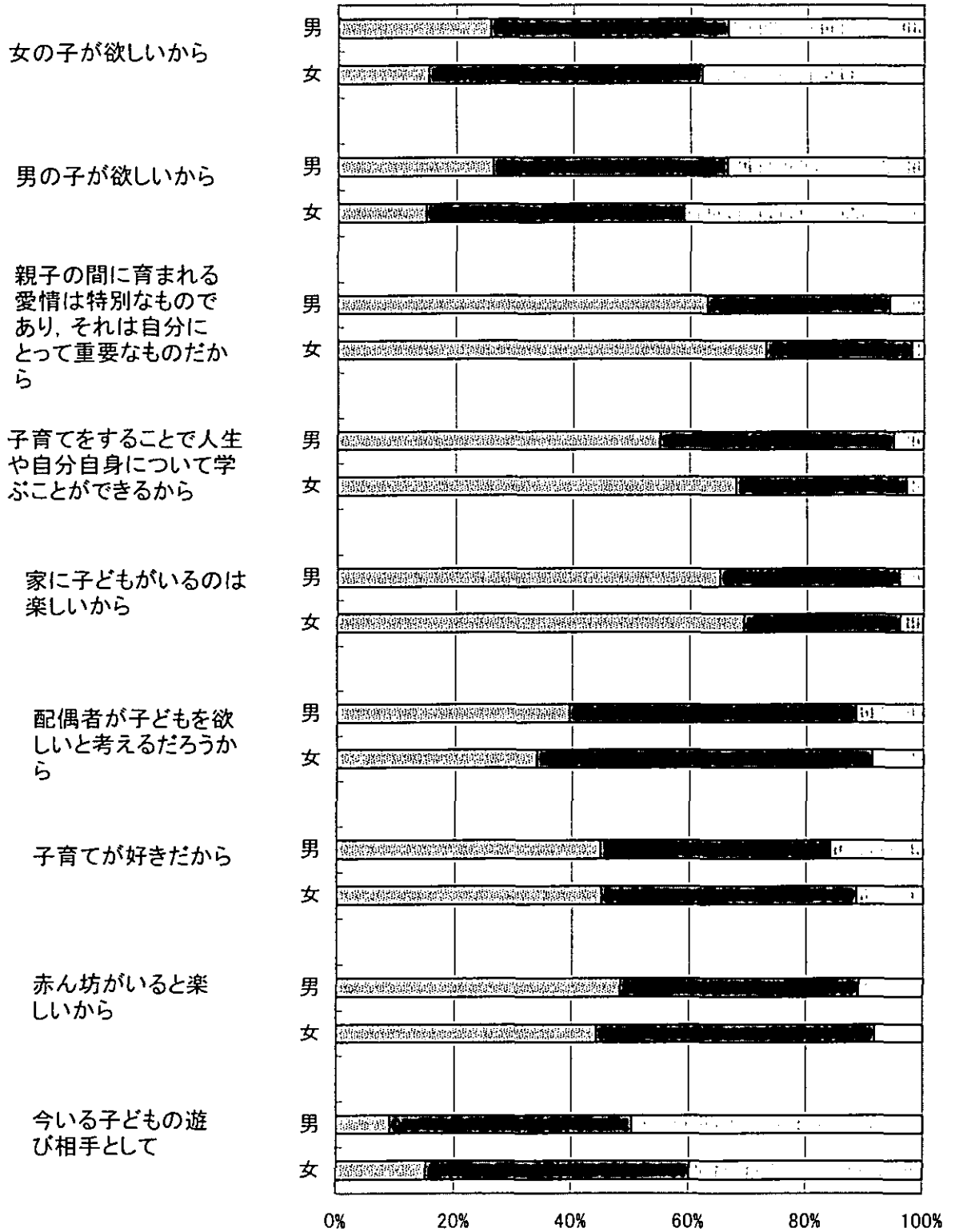


図6. 子どもが欲しい一般的理由2

■非常に重要 □やや重要 □重要でない

子どもができた場合には夫婦間に問題またはストレスが生じるだろうから

子どもを十分に世話することができなくなる、あるいは子どもに十分な注意を向けることができなくなるから

子どもを育てることは感情的なストレスになるから

人口増加問題が心配されるから

子どもができると配偶者と過ごす時間が減るから

子どもがいるとしなければならぬことも増えるし、面倒もかかるから

子どもができると自分の好きなことをする自由がなくなるから

配偶者がもう子どもは欲しくないと考えているだろうから

子どもを持つと家計が圧迫されるから

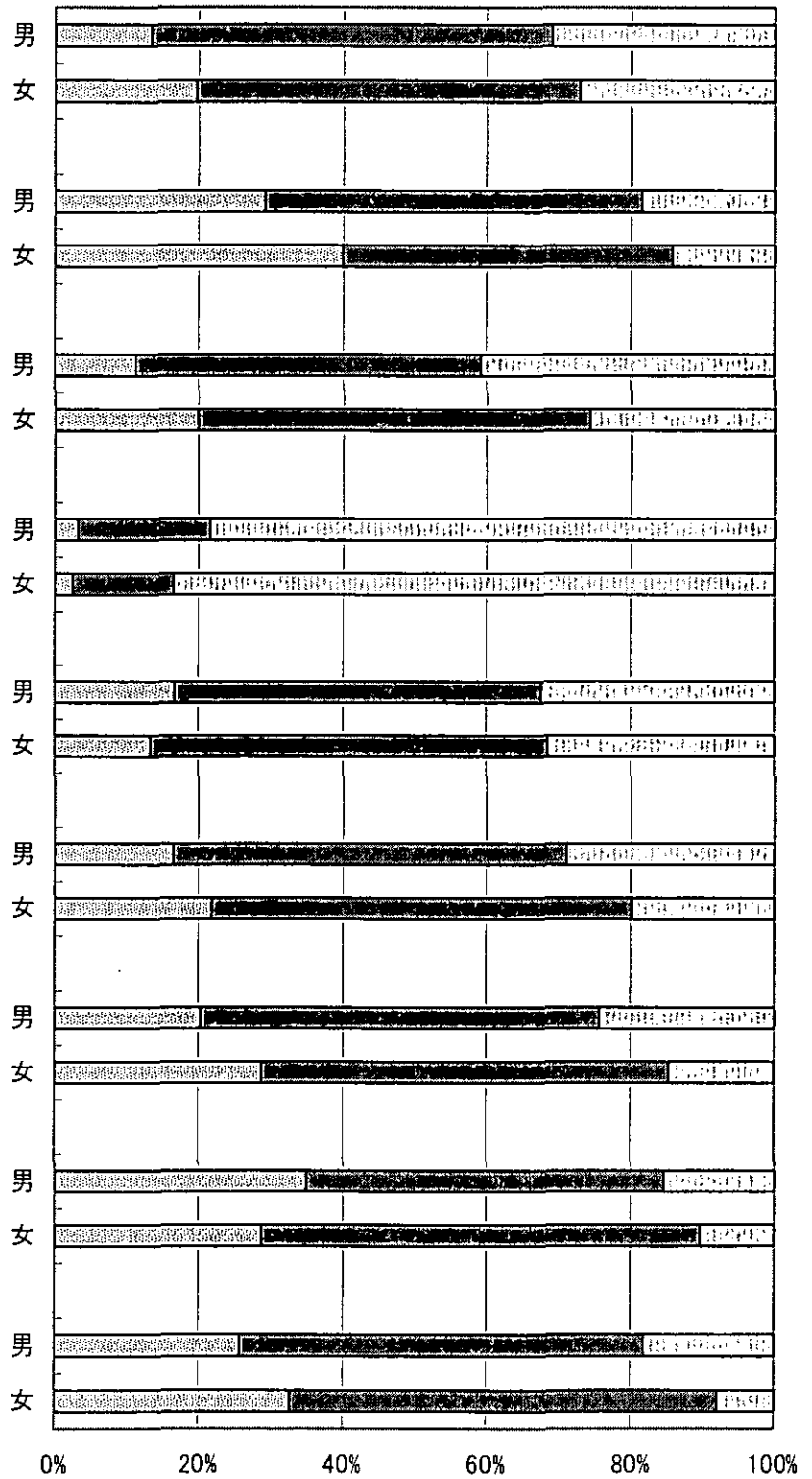


図7 子どもが欲しくない一般的理由(男女比較)

2-6. もう子どもは要らないと判断する基準

回答者が所属する社会において一般的に、どれくらいの数の子どもがいる場合に「もう子どもは要らない」と判断するかたずねた。回答の人数の平均値を算出した結果は、2.57人であった。

2-7. 欲しい子どもの数

回答者本人が、将来子供が欲しいと思うかどうかについて、「はい」「いいえ」「わからない」の3択で回答を得た、また子供が欲しい場合、欲しいと思う子どもの数についてたずねた。

将来子どもが欲しいか、という設問に対して、83.4%のものが「ほしい」と回答しており（表15）、この回答にも男女差は見られなかった（女性83.6%、男性83.1%）。欲しい子どもの人数は、「2人」という回答が64.4%と一番多く、次に「3人」という回答が27.8%、であり、3番目に回答者の多かった「1人」の3.5%を大きく引き離していた（表16）。

表15. 将来子どもが欲しいか (%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=373)	83.6	6.4	9.9
男	100.0(n=409)	83.1	5.1	11.7
合計	100.0(n=782)	83.4	5.8	10.9

表16. 欲しいと考える子どもの数 (%)

	合計	1人	2人	3人	4人以上	わからない	無回答
女	100.0(n=312)	3.8	65.1	26.0	3.5	1.6	—
男	100.0(n=340)	3.2	63.8	29.4	0.9	2.4	0.3
合計	100.0(n=652)	3.5	64.4	27.8	2.1	2.0	0.2

2-7. 子どもがほしい理由

回答者本人が子どもをほしいと考える理由について、柏木ら（柏木・永久，1999）の「子生みの理由」の調査項目を参考に、30項目からなる質問紙への回答を求めた。各項目へは、「そのとおりあてはまる」から「全くあてはまらない」の4件法で評定させた。それぞれの項目ごとに、平均値を算出し男女で比較した結果を、図8に示した。

ほとんどの項目で、大きな男女差はなかったが、「子どもを育ててみたい」「配偶者の子どもがほしい」「女性として出産・育児を経験したい」などの項目では、女性の方が子どもを持つ理由として強く考えており、「子孫を残したい」「仕事に区切りがついた」「次世代をつくるのは人としてのつとめ」「姓やお墓を継ぐものが必要」などの項目では、男性の方が子どもを持つ理由として、強く考えていることが判明した。

□ 女性 ■ 男性

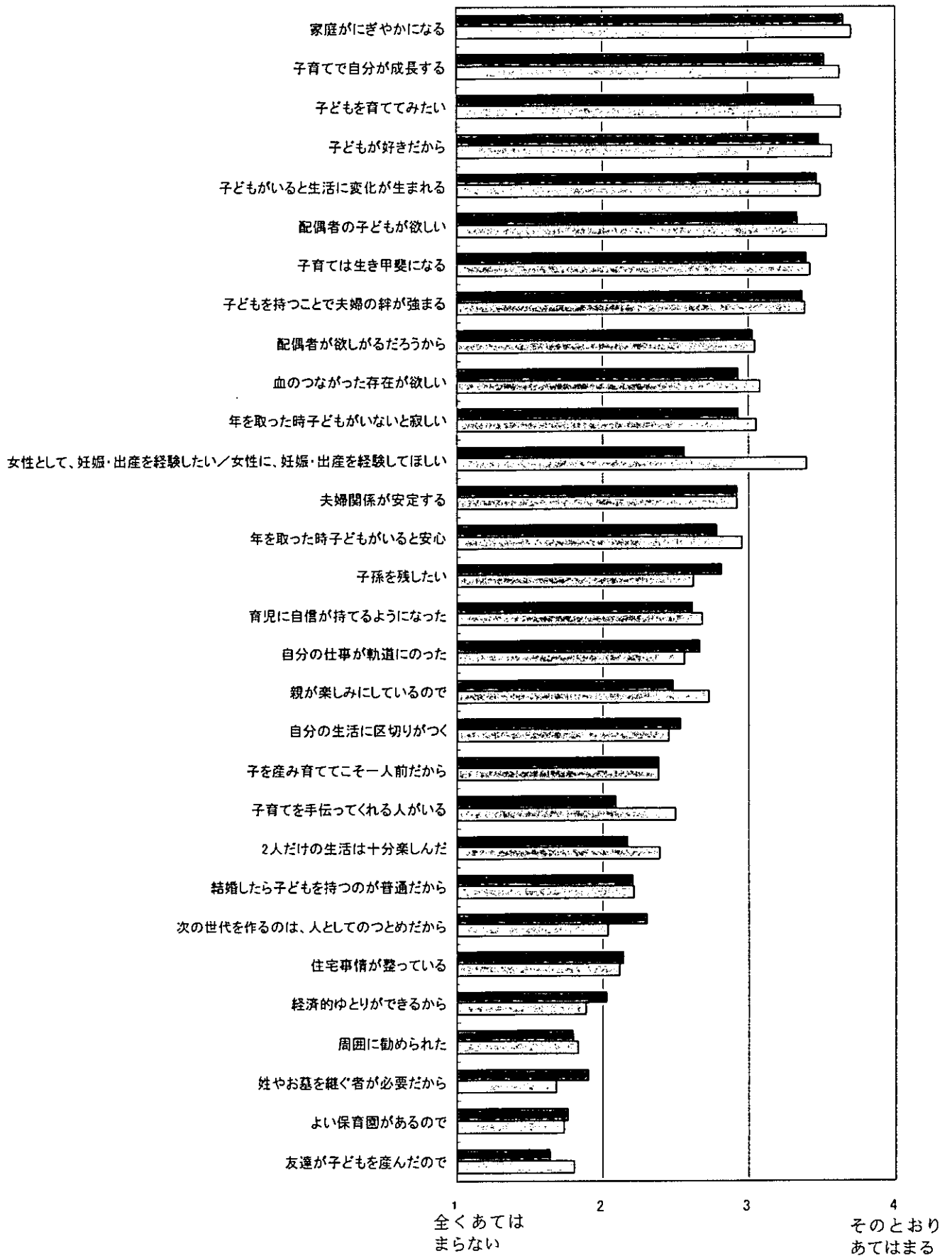


図8. 子産みの理由

2-8. 「主体的な育児」への意欲

回答者自身の、主体的な育児への意欲（育児の分担を配偶者と同等かそれ以上になうつもりがあるかどうか）について、「はい」「いいえ」「わからない」の3択で回答を求めた。

その結果、83.0%のものが「主体的に育児をするつもり」と回答しているが、この設問においては、回答に男女の差が見られた（女性93.3%、男性73.5%）。しかしながら、男性は女性よりも20ポイントほど回答率が低くなっていたものの、約4分の3近くのもので、「配偶者と同等かそれ以上の育児分担をする」つもりであるという結果は、決して育児への意欲が低いというわけではないことが明らかになった。

表17. 主体的に育児をするつもりがあるか (%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=312)	93.3	—	6.7
男	100.0(n=340)	73.5	12.6	13.8
合計	100.0(n=652)	83.0	6.6	10.4

「主体的に育児をするつもりがない」と回答した人に対して、その場合だれが主体的に育児をすると思うかについて、「配偶者」「自分の親」「配偶者の親」「その他」の4択で回答を求めた（表18）。その結果、女性では自分以外に主体的に育児をする人をあげたものはいなかった。男性では、配偶者が主体的に育児をすると回答したものが97.7%とほとんどであった。

表18. 自分以外で主体的に子育てをする人 (%)

	合計	配偶者	自分の親
女	—	—	—
男	100.0(n=43)	97.7	2.3
合計	100.0(n=43)	97.7	2.3

さらに、「主体的に育児をするつもりがない理由」についてたずねた結果、「他のこと（仕事など）に専念したいから」とする回答が44.2%と最も多かった（表19）。

表19. 主体的に子育てをしない理由 (%)

	合計	子育てに興味が ないから	他のこと(仕事 など)に専念 したいから	仕事上の昇進 や昇格に影 響があると 困るから	他の人(例え ば配偶者)の 仕事だと思 うから	自分は向い ていないか ら	子育てをす る慣習がな いから
女	—	—	—	—	—	—	—
男	100.0(n=43)	2.3	44.2	16.3	27.9	2.3	7.0
合計	100.0(n=43)	2.3	44.2	16.3	27.9	2.3	7.0

2-9. 子育ての経済的負担

「子どもに期待する最終学歴」についてたずねた結果、「大学」と回答した人が66.9%と最も多かった。回答者自身が大学生であるため、自分と同程度の学歴を期待していることがわかった。

表20. 子どもに期待する最終学歴 (%)

	合計	中学校	高校	大学	大学院	その他の学校 (具体的に)	状況によ る	わからな い	無回答
女	100.0(n=312)	—	3.5	73.7	3.5	0.6	16.0	2.2	0.3
男	100.0(n=340)	0.6	2.9	60.6	2.9	1.5	27.1	2.9	1.5
合計	100.0(n=652)	0.3	3.2	66.9	3.2	1.1	21.8	2.6	0.9

さらに、経済的な心配がない場合に、ほしいと考える子どもの数が変化するかをたずねた。その結果変化すると回答したものは、29.3%であり、変わらないと回答したものは55.0%であった(表21-1)。子ども数が変化すると回答した人に、何人になるかについてたずねた結果、平均3.30人であった。その場合の子どもの数について、表21-2に示した。

表21-1. 経済的心配がない場合、欲しい子どもの数は変わるか (%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=373)	29.2	54.7	16.1
男	100.0(n=409)	29.3	55.3	15.4
合計	100.0(n=782)	29.3	55.0	15.7

表21-2. その場合の子どもの数 (%)

	合計	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	無回答
女	100.0(n=109)	0.9	7.3	12.8	52.3	11.9	11.0	0.9	—	0.9	0.9	—	0.9
男	100.0(n=120)	—	4.2	13.3	51.7	18.3	6.7	—	0.8	0.8	—	3.3	0.8
合計	100.0(n=229)	0.4	5.7	13.1	52.0	15.3	8.7	0.4	0.4	0.9	0.4	1.7	0.9

また、政府が子どもを大学まで卒業させるまでの教育費を負担する場合、ほしいと考える子どもの数が変化するかをたずねた。その結果、変化すると回答した人は24.8%であり、変わらないと回答した人は60%であった(表22-1)。子ども数が変化すると回答した人に、何人になるかについてたずねた結果、平均3.79人であった。その場合の子どもの数について、表22-2に示した。

表22-1. 政府が教育費を負担してくれる場合、欲しい子どもの数は変わるか (%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=373)	26.3	57.9	15.8
男	100.0(n=409)	23.5	61.9	14.7
合計	100.0(n=782)	24.8	60.0	15.2

表22-2. その場合の欲しい子どもの数

	合計	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	20	できるだけ多く	無回答
女	100.0(n=98)	1.0	8.2	52.0	15.3	15.3	2.0	—	1.0	2.0	—	—	—	1.0	2.0
男	100.0(n=96)	1.0	8.3	46.9	21.9	11.5	1.0	1.0	1.0	—	3.1	1.0	1.0	2.1	—
合計	100.0(n=194)	1.0	8.2	49.5	18.6	13.4	1.5	0.5	1.0	1.0	1.5	0.5	0.5	1.5	1.0

最後に、経済的に負担にならないと考える子どもの数をたずねたところ、2人と回答した人が59.7%ともっとも多く、全体の平均は2.04人であった。回答をまとめたものを表23に示した。

表23. 経済的に負担にならない子どもの数

	合計	0	1	2	3	4	5	8	10	できるだけ多く	無回答
女	100.0(n=373)	2.4	17.4	60.1	16.9	1.9	0.3	0.3	0.3	—	0.5
男	100.0(n=409)	1.7	15.9	59.4	20.5	1.5	0.2	—	—	0.2	0.5
合計	100.0(n=782)	2.0	16.6	59.7	18.8	1.7	0.3	0.1	0.1	0.1	0.5

2-10. 子どもに対する経済的期待

回答者自身が、自分の子どもに対して、将来経済的な援助を期待しているか、また介護などの実地的な援助を期待しているかをたずね、それぞれ「はい」「いいえ」「わからない」の3択で回答を求めた。経済的な援助に関しては、期待していると回答した人は11.5%、期待していないと回答した人は61.3%であった。また、介護などの援助を期待すると回答した人は23.3%、期待しないと回答した人は45.8%であった。それぞれの回答を、表24、表25に示した。経済的な援助の期待はあまり考えていないことが明らかになった。

表24. 子どもに経済的援助を期待するか (%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=373)	9.9	59.8	30.3
男	100.0(n=409)	13.0	62.6	24.4
合計	100.0(n=782)	11.5	61.3	27.2

表25. 子どもに、介護などの援助を期待する(%)

	合計	はい	いいえ	わからない
女	100.0(n=373)	24.9	40.5	34.6
男	100.0(n=409)	21.8	50.6	27.6
合計	100.0(n=782)	23.3	45.8	30.9

また、老後自分の子どもに経済的に依存する程度についてたずねた。その結果を表26にまとめた。経済的に頼る度合いは「そうでもない」という回答が51.7%と最も多かった。

表26. 老後、経済的に子どもに依存する程度 (%)

	合計	大きい	そうでもない	まったく頼らない	状況による	わからない	無回答
女	100.0(n=373)	8.6	52.3	16.9	17.2	5.1	—
男	100.0(n=409)	5.6	51.1	24.0	15.2	3.7	0.5
合計	100.0(n=782)	7.0	51.7	20.6	16.1	4.3	0.3

次に、回答者自身が、自分の親へどのように援助をすると考えているかをたずねた。

まず、結婚後の親との同居について「積極的」「消極的」「状況による」「わからない」の4択で回答を求めた。その結果、「消極的」46.4%と「状況による」43.5%という回答が、同程度であった。結果を表27に示した。

表27. 結婚後の親との同居 (%)

	合計	積極的	消極的	状況による	わからない
女	100.0(n=373)	8.0	50.1	39.9	1.9
男	100.0(n=409)	7.1	43.0	46.7	3.2
合計	100.0(n=782)	7.5	46.4	43.5	2.6

回答者本人が、働くようになったときに、親へ収入の一部を渡すことについての考えをたずね、「積極的」「消極的」「状況による」「わからない」の4択で回答を求めた。その結果、「積極的」という回答が、47.1%ともっとも多く、「状況による」が40.7%と次に多いという結果であった。結果を表28に示した。

表28. 収入の一部を親へ渡すこと (%)

	合計	積極的	消極的	状況による	わからない
女	100.0(n=373)	51.5	8.0	37.5	2.9
男	100.0(n=409)	43.0	10.5	43.5	2.9
合計	100.0(n=782)	47.1	9.3	40.7	2.9

回答者の親が年をとったとき、親を扶養することについての考えをたずね、「積極的」「消極的」「状況による」「わからない」の4択で回答を求めた。その結果、「積極的」という回答が、47.7%ともっとも多く、「状況による」が42.2%と次に多いという結果であった。結果を表29に示した。

表29. 年をとった両親の扶養 (%)

	合計	積極的	消極的	状況による	わからない
女	100.0(n=373)	49.1	6.7	42.9	1.3
男	100.0(n=409)	46.5	9.8	41.6	2.2
合計	100.0(n=782)	47.7	8.3	42.2	1.8

最後に、家事や家業の手伝いをする事についての考え方をたずね、「積極的」「消極的」「状況による」「わからない」の4択で回答を求めた。その結果、「積極的」という回答が、51.9%ともっとも多く、「状況による」が35.9%と次に多いという結果であった。結果を表30に示した。

表30. 家事や家業の手伝い (%)

	合計	積極的	消極的	状況による	わからない
女	100.0(n=373)	49.1	9.7	38.6	2.7
男	100.0(n=409)	54.5	9.8	33.5	2.2
合計	100.0(n=782)	51.9	9.7	35.9	2.4

2-1 1. 育児休業制度

育児休業制度についてどの程度知っているかについてたずねた。

まず、「育児休業制度」について聞いたことがあるかどうかをたずね、結果を表31にまとめた。92.8%の人が聞いたことがあり、制度自体の認知度は大変高いことがわかった。

表31. 育児休業制度について聞いたことがあるか (%)

	合計	聞いたことがある	聞いたことはない
女	100.0(n=373)	96.8	3.2
男	100.0(n=409)	89.2	10.8
合計	100.0(n=782)	92.8	7.2

次に、育児休業制度の詳細についてたずねた。勤務先に育児休業制度がない場合も、申し出をすれば育児休業ができることを知っている人は25.7%、知らない人は74.2%であった（表32）。また、妻が専業主婦や産休中であっても、男性も育児休業制度を利用できることを知っている人は、38.4%、知らない人は61.5%であった（表33）。さらに、育児休業制度には、時間外労働の制限・深夜業の制限・勤務時間の短縮措置があることを知っている人は31.3%、知らない人は68.7%であった（表34）。

制度の存在についての認知度は高くても、内容についてはあまり知られていないことがあきらかになった。

表32. 勤務先に制度がない場合でも、申し出れば休業できることを知っているか (%)

	合計	知っている	知らない	無回答
女	100.0(n=373)	24.7	75.1	0.3
男	100.0(n=409)	26.7	73.3	—
合計	100.0(n=782)	25.7	74.2	0.1

表33. 妻が専業主婦／産休中の場合でも、男性も8週間の育児休業ができることを知っているか (%)

	合計	知っている	知らない	無回答
女	100.0(n=373)	45.3	54.4	0.3
男	100.0(n=409)	32.0	68.0	—
合計	100.0(n=782)	38.4	61.5	0.1

表34. 育児休業制度の時間外労働制限、深夜業制限、勤務時間短縮について知っているか (%)

	合計	知っている	知らない
女	100.0(n=373)	39.1	60.9
男	100.0(n=409)	24.2	75.8
合計	100.0(n=782)	31.3	68.7

次に、将来、育児休業制度を利用したいと考えるかについて、「はい」「いいえ」で回答を求めた。

女性では90%以上の方が制度を利用したいと考えており、働きながら育児をする希望が大きいことがわかった。また男性も、76.5%の方が利用したいと回答しており、実際に育児への参加意欲が高いことが示された（表35）。

表35. 育児休業制度の利用希望 (%)

	合計	はい	いいえ
女	100.0(n=373)	90.6	9.4
男	100.0(n=409)	76.5	23.5
合計	100.0(n=782)	83.2	16.8

育児休業制度を利用したいと回答した人のうち、どの制度を利用したいかについてたずねた（表36～表39）。特に時間外労働の制限措置と、深夜業の制限措置については、男性も利用したいと回答した人が90%を超えるという結果であった。しかし、育児休業や労働時間短縮については、利用したくないと回答した男性が、それぞれ25.2%と23%であり、制度を利用するには抵抗があることが示された。

表36. 育児休業の利用 (%)

	合計	利用したい	利用したくない	無回答
女	100.0(n=338)	98.5	1.5	—
男	100.0(n=313)	74.1	25.2	0.6
合計	100.0(n=651)	86.8	12.9	0.3

表37. 時間外労働制限措置の利用 (%)

	合計	利用したい	利用したくない	無回答
女	100.0(n=338)	94.4	5.3	0.3
男	100.0(n=313)	90.4	9.3	0.3
合計	100.0(n=651)	92.5	7.2	0.3

表38. 深夜業制限措置の利用 (%)

	合計	利用したい	利用したくない	無回答
女	100.0(n=338)	96.7	2.7	0.6
男	100.0(n=313)	90.7	8.9	0.3
合計	100.0(n=651)	93.9	5.7	0.5

表39. 時間短縮措置の利用 (%)

	合計	利用したい	利用したくない	無回答
女	100.0(n=338)	88.8	10.9	0.3
男	100.0(n=313)	76.4	23.0	0.6
合計	100.0(n=651)	82.8	16.7	0.5

一方、育児休業制度は利用したくないと回答した人に、その理由をたずねた。結果を表40に示した。

女性では「子どもを持つつもりがない」「復帰後仕事についていけるか不安」「復帰後の処遇に不安がある」などの回答が多く、男性は「配偶者が子育てに専念するだろう」「仕事が面白いだろうから」という理由が多かった。男性の育児休業制度を利用しない理由は、育児を主体的にしない理由と重なるものであった。

表40. 育児休業制度を利用しない理由 (%)

	合計	子どもを持つつもりがないから	配偶者が子育てに専念するだろうから	子どもの保育についての手配ができるだろうから	体むと復帰後仕事についていけるか不安だから	仕事が面白いだろうから	同僚に迷惑をかけたくないから	復帰後の処遇に不安があるから	休業すると経済的に苦しいだろうから	職場に育児休業を取得しづらい雰囲気があるだろうから	その他	無回答
女	100.0(n=35)	28.6	—	2.9	17.1	2.9	—	14.3	8.6	11.4	8.6	5.7
男	100.0(n=96)	13.5	16.7	1.0	10.4	13.5	14.6	9.4	10.4	6.3	1.0	3.1
合計	100.0(n=131)	17.6	12.2	1.5	12.2	10.7	10.7	10.7	9.9	7.6	3.1	3.8

仮に、職場で男女とも50%以上の方が育児休業制度を利用する場合、回答者本人も利用するかをたずね、「はい」「いいえ」で回答を求めた。その結果を表41に示した。利用すると回答した人は90.7%にのぼり、周囲の人が当たり前で育児休業をする環境であれば、積極的に利用するつもりのあることがあきらかになった。

表41. 職場で50%以上の方が利用している場合、利用するか (%)

	合計	はい	いいえ	無回答
女	100.0(n=373)	94.9	5.1	—
男	100.0(n=409)	86.8	13.0	0.2
合計	100.0(n=782)	90.7	9.2	0.1

出産・育児のしやすさを考慮に入れて就職活動を行うか（行ったか）についてたずねた結果、女性では40.2%の人が考慮に入れると回答しているのに比べ、男性では16.4%の人のみが考慮に入れると回答した。

表42. 就職活動の際、出産・育児のしやすさを考慮に入れたか (%)

	合計	はい	いいえ
女	100.0(n=373)	40.2	59.8
男	100.0(n=409)	16.4	83.6
合計	100.0(n=782)	27.7	72.3

2-12. 少子化関連の政策への評価

少子化対策として考えられるいくつかの施策について、どの程度役に立つとかがえるかについて、「とても役に立つ」「どちらかといえば役に立つ」「どちらかといえば役にたたない」「まったく役に立たない」の4件法で回答を求めた。各施策ごとに、結果をまとめ、表43から表54に示した。

どの政策とも、高い評価がされていたが、男性対象の施策に関しては、比較的評価が低い傾向にあった。また、育児休業中の所得保障については、「とても役に立つ」との回答が79.3%と高く、所得保障を行いながら、他の対策を立てることが求められていることがわかった。

表43. 女性が出産後も育児をしながら働き続けられる職場作りに関する政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	79.4	18.5	1.6	0.3	0.3
男	100.0(n=409)	68.5	27.1	3.2	1.2	—
合計	100.0(n=782)	73.7	23.0	2.4	0.8	0.1

表44. 女性の育児休業制度(1年以内の休業)を促進させる政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	72.4	26.3	0.5	0.5	0.3
男	100.0(n=409)	64.8	29.8	4.6	0.7	—
合計	100.0(n=782)	68.4	28.1	2.7	0.6	0.1

表45. 男性の育児休業制度(1年以内の休業)を促進させる政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない
女	100.0(n=373)	59.0	31.9	7.5	1.6
男	100.0(n=409)	49.6	37.7	9.8	2.9
合計	100.0(n=782)	54.1	34.9	8.7	2.3

表46. 子育て期間における女性の勤務時間の縮減に関する政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない
女	100.0(n=373)	66.5	29.5	3.8	0.3
男	100.0(n=409)	59.9	35.0	3.9	1.2
合計	100.0(n=782)	63.0	32.4	3.8	0.8

表47. 子育て期間における男性の勤務時間の縮減に関する政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	51.5	35.7	11.5	1.3	—
男	100.0(n=409)	42.5	40.8	13.7	2.4	0.5
合計	100.0(n=782)	46.8	38.4	12.7	1.9	0.3

表48. 子育てをしている女性への企業内の協力体制の整備 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	77.2	20.9	1.3	0.5	—
男	100.0(n=409)	68.2	25.4	5.1	1.2	—
合計	100.0(n=782)	72.5	23.3	3.3	0.9	—

表49. 子育てをしている男性への企業内の協力体制の整備 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	60.1	30.6	7.2	2.1	—
男	100.0(n=409)	50.9	37.2	8.8	2.9	0.2
合計	100.0(n=782)	55.2	34.0	8.1	2.6	0.1

表50. 妊娠・出産や育児休業制度取得を理由とする不利益取り扱いや嫌がらせの防止に関する政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	76.1	19.6	4.0	0.3	—
男	100.0(n=409)	65.5	26.2	7.3	1.0	—
合計	100.0(n=782)	70.6	23.0	5.8	0.6	—

表51. 育児休業中の所得の保障 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	84.5	12.9	2.4	0.3	—
男	100.0(n=409)	74.6	20.0	3.9	1.2	0.2
合計	100.0(n=782)	79.3	16.6	3.2	0.8	0.1

表52. 出産・育児による休業・退職後の職場復帰あるいは再雇用の支援 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない	無回答
女	100.0(n=373)	82.3	15.5	1.6	0.3	0.3
男	100.0(n=409)	71.9	22.7	4.4	1.0	-
合計	100.0(n=782)	76.9	19.3	3.1	0.6	0.1

表53. ライフスタイルに応じた多様な働き方を支援する政策 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない
女	100.0(n=373)	68.4	26.8	4.6	0.3
男	100.0(n=409)	57.0	34.0	8.1	1.0
合計	100.0(n=782)	62.4	30.6	6.4	0.6

表54. 保育サービスの充実 (%)

	合計	とても役に立つ	どちらかといえば役に立つ	どちらかといえば役に立たない	まったく役に立たない
女	100.0(n=373)	79.4	18.2	2.1	0.3
男	100.0(n=409)	66.5	26.2	6.4	1.0
合計	100.0(n=782)	72.6	22.4	4.3	0.6

2-13. 自由記述欄(子どもに対する感想など)

「身の回りの人が子どもを持つ理由」と、調査の最後に聞いた「子どもに対する感想、意見」の設問における自由解答について、データマイニング分析を行った。自由回答中に出てくる名詞を対象にキーワードを調べたところ、448語が抽出された。キーワードの頻度を集計したところ頻度の多い上位10語は、全1978語中「子ども」「子供」が合計で339語ともっとも多く、以下「自分」167語、「かわいい」97語、「人」64語、「家庭」63語、「幸せ」43語、「家族」39語、「子育て」36語、「理由」33語、「人生」33語、「愛情」30語、「自然」30語であった。

「子どもに対する感想、意見」については、下記に示した。

<子どもを持つことに関する意見>

- ・“親”という立場になる事はその人にとって人生を豊かにしまた一人の人間としてより大きなものになるためにも非常に大切なことだと思う。しかし計画もなくむやみに子供を作ることにはあまりいいとは思わない。間違った人生設計をすることはのちのちの子供にとってもよくないし親にとってもよくない。親にとっても子にとっても充実した人生を送るためにもきちんと考えて子供を産むべきである。(20歳・男)
- ・「子ども」という新しい生命を誕生させるということは非常に慎重にそして真剣に考えていかなければならない。私のエゴで生まれるということもあり得る。非常に難しい問題である。(24歳・男)
- ・21歳の現在の私は子どもを持ちたいとまだ思えない。自分のやりたいことを優先させたい気持ちが大きい。(21歳・女)
- ・かわいい娘を産みたい。子どもより奥さんを大事にして生きたい。(19歳・男)
- ・この調査について子どもを持つ理由は人それぞれあると思うし子どもに望むものもいろいろあると思うが子供がいるから自分たちが負担になると考えるより子供がいるからより楽しいと思える生活を将来送りたいと思った。(20歳・女)
- ・まだ子供を持つことは想像ができませんが少しずつ色々と考えていきたいとします。調査頑張ってください。(20歳・女)
- ・もっとてんしんらんまんに育ててほしい。(19歳・女)
- ・一族を残したいから宗教上子どもが必要だからという質問が何度かあったのがとても目に付きました。私の家庭は特にどの宗教にも所属しておらずクリスマスも祝うしお正月には神社に行く日本の典型的家庭です。一族などの言葉もまったく使うことのないのでそのような義務感で子どもを持ちたいとはまったく思いません。しかし四人兄弟の中で今まで生きてきて父と母をずっと見てきてこのような家庭を自分も築きたいとはとても思います。しかし結婚しても職についていたいと思うので妊娠・出産後にそのことについての不安は多々あります。(20歳・女)
- ・改めて子供が欲しいと思いました。(22歳・男)

- ・海外一人旅をしていたので家族を持たない人子どものいない人と接することが多かった。そのせいか子どもがいなくてもまた別の人生があり喜び楽しみもある。子どもがいればその人生はないと思う。(22歳・男)
- ・学生で子どもを持つことがあまり歓迎されない社会なのが悲しいです。学生には経済力がないから仕方ないのかもしれませんが周りの子でも「学生だからすごく産みたいけど堕ろした」という子が多いです。何か改善できることはないかなあと最近思います。(19歳・女)
- ・経済云々よりも今の社会状態を見る限り自分の子どもをしっかりと育てられるか不安です。子育てには経済的負担と共に大きな責任が伴います。それに耐えられるかどうか自信がありません。いないよりマシかもしれませんがきちんとしつけもできないで産んだり自分の「おもちゃ」のようにするくらいなら産まないほうがいいのではとも思っています。(19歳・男)
- ・今の日本では安心して子どもを育てられないと思うので欲しくても迷います。特に仕事への影響が心配です。(22歳・女)
- ・今はまだ全く結婚とか子供のことを考えていない状態なのですが就職活動のときに育児休暇制度が整っているかなどを少し気にしてみようかなと思いました。(20歳・女)
- ・最近何も考えずに子供を作るものがあるがそういったものは自分のことしか考えていないと思う。第一に考えるとことは子供の幸せであって幸せにできないのであったら作るべきではない。幸せにできる自信がついてから作るべき。考え方が古いとか硬いとかいわれるかもしれないがあたりまえのことではないだろうか・・・(20歳・男)
- ・子どもがほしい(21歳・男)
- ・子どもが欲しいから作るといったことができないくらい現在不景気である。少子化が促進される。学費が高い。政府はどう対策しているのか気になる。昔に比べて子どもを欲しがらない女性が増えた。それは尊重されるべきである。仕事と子育ての両立は可能であるのか。母親に育てられた子どもと保育園で育てられた子どもの相違点はあるのかあるな何か知りたい。ないなら保育園に預けて仕事します。(20歳・女)
- ・子どもはほしいが費用もかかるし仕事でのキャリアアップが阻まれる現実があるので実際に育てやすい環境を整えてほしい。保育所の入所待機幼児をゼロにするだけで問題は解決されるわけがない。社会の意識を変えていくよう仕掛ける必要があると思う。(22歳・女)
- ・子どもはほしいけど私も1番の悩みの理由は経済的または労働(育児休暇職場復帰など)です。それが緩和されれば2人子供がほしいです。でも問題がよくならなかつたら1人くらいしかほしくありません。1人をしっかりと育てたいから。(19歳・女)
- ・子どもはほしいとは思いますが現実では仕事(自分のキャリア)保育園経済的な負担などを考えると難しいと思います。(28歳・女)
- ・子どもをもつかどうかはその時点での自分の経済的状況等をしっかり把握していなければ失敗すると思う。(21歳・男)
- ・子どもを育てるのは親(大人)であるので子育てを充実したものにするには親の環境を整えることが最重要だと思われる。(19歳・男)

- ・子どもを育てるのは大変だと思うので現実的に考えて子どもを持つようにすべきだと思う。(21歳・女)
- ・子どもを持つか否かは全くもってその人の価値観 すなわち何に重きをおいているかによる
と考える。(29歳・男)
- ・子どもを持つことで夫婦の愛の絆が強くなる。(19歳・男)
- ・子どもを持つということは配偶者や子どもに対して責任を伴うので慎重に行うべきだと思
った。(20歳・男)
- ・子どもを持つという事を少しながら現実的に考えさせてもらえて勉強になりました。(20
歳・男)
- ・子どもを持つのはまだまだ先だと考えているため社会におけるいろいろな政策についてほ
とんど知識がないのだと改めて認識しました。これからはこのようなことに少しずつ興味
を持っていこうと思いました。(19歳・女)
- ・子どもを授かるということは素晴らしいことだと思う。将来自分の親のようになりたいと
思う(20歳・女)
- ・子を持つこと育児は個人の自由だが子を持つからにはそれなりの責任感を持ってその仕事
を全うすべきだとは思う。(20歳・男)
- ・子育てと仕事の両立はできなさそうなので子供を産むことはないだろうと思っているので
すがそれよりも自分が母親になった時に問題なのは父親になるだろう相手の気持ちの変化
であると考えています。(19歳・女)
- ・子供がいる生活はきっと楽しいだろうからきっと子供がいる生活を望むと思う。(20歳・
男)
- ・子供が好きだからという理由だけでは子供は育てられないと思う。現在子育ての経験のあ
る人はどのような理由で生んでどこからの知識で育てのかなどが知りたい。子供を生んで
育てるといことはどのようなことなのかまだいまいよく分からず簡単には考えられな
い。(22歳・女)
- ・子供は何かの為に産むものではないと思う。(21歳・男)
- ・子供を持つ持たないは各個人や各夫婦の洗濯ではあるが子供を持つことによって生活(家
庭生活・教育・仕事など)に支障が起きることはあってはならないと思う。というのも子
供は親の財産であると同時に将来の私たちの生活を支えていくまた社会の発展に貢献する
財産だからである。(23歳・男)
- ・私が子どもを欲しいと思う理由 1. 子どもを残したい(自分の生きてきた意味を再認識
したい) 2. 配偶者との子供が欲しい 3. 老後のため 私が子どもに期待すること
・自分のできなかったことをかわりにやってもらおう ex) 自分よりも高学歴スポーツにおい
て自分よりも上のレベルまで行って欲しい 結局は自分の為か・・・(21歳・男)
- ・私は四人姉弟で育ったので子供のいない生活や一人っ子は考えられない。将来は二人以上
の子どもがほしいと思う。(20歳・女)
- ・私は子供がほしいと思っている。その理由はとても抽象的だが私が生きた証になるからだ
と思っている。別に「子孫が・・・」とか「一族が・・・」とかではない(つもり)だけ

ど自分みたいな歴史に名を残すようなことはおそらくできないであろう存在が生きていたのだと未来へ向かって言うためには自分の遺伝子を残すことが一番手っ取り早いかなとおもった。誰かのためでなく自分のために子供を産まなければきっと子供をずっと愛していくことはできないように思う。(20歳・女)

- ・私は子供を持つことに消極的です。経済的理由はもちろんですが“子供を持ちもし失ったときの悲しさ”をこのご時勢考えてしまいます。多発する若者の自殺や憤りを感じざるを得ない卑劣な少年・少女の殺人の数々・・・、テレビなどで遺族の方々の悲痛な叫びを聞いていると胸が痛みます。(20歳・男)
- ・私は少し前まで結婚も子供もしないしいらないと考えてました。ですが子供好きな(子育てに前向きな)友人と話している内に自分も子どもを産んで育てたいと思うようになりまし。今ではできる限り(お金の心配がなければ)たくさんの子供が欲しいと思っています。私は1人っ子なので“きょうだい”というものがどういうものか分かりませんがきょうだいがいたらきっと楽しいだろうと思います。(感想になってないかもです…すみません)(23歳・女)
- ・自分が一人っ子だったので大家族というものに憧れがあり子供はできるだけ欲しいと思っているが経済的な事を考えると難しいとつくづく実感させられた。できるだけお金を稼がなくては・・・(19歳・女)
- ・自分が子どもを持つことなんて考えてみたことがあまりなかったので調査に答えていておもしろかった。今はとても子どもを持てるような経済状況じゃないが、将来働き出して子どもに不便をかけずに育てられるぐらいの収入を得られるようになれば、子どもを持ちたいと思う。自分の子どもができたら、かわいくてたまらないだろう。(20歳・男)
- ・自分の子供がほしいという気持ちにそれほど重要な理由(経済的なことなど)は関係ないと思う。(20歳・男)
- ・将来子どもを産むとしたらたぶん意図的には子どもをつくらうとはしないと思います。産んでもせいぜいひとりかな・・・。(21歳・女)
- ・将来子供はほしいが仕事に支障が出るのは避けたい。(21歳・女)
- ・早く子供が欲しくなった。(22歳・女)
- ・多く子どもを持つには経済力が必要であると考えます。(31歳・男)
- ・大学に入った当初のころは子育てはおろか結婚もさほどしたいとは思っていませんでした。今は結婚はしたいと思うようになりました。特に最近立て続けに周りの同じ年令の人が結婚したのに強く影響は受けていると思います。これから先自分の周りが子どもを持つようになってくると自分も子どもが欲しいとより強く考えるようになるだろうと感じます。私が「大人」になってから子供に多く接したのは公文でアルバイトをしていたとき(大学1, 2年)なのですがその時「子どもってこういうものだったんだ」という新鮮な感覚を味わいました。自分が子ども(23歳・女)
- ・誰でも子どもはほしいと思います。でもやっぱり経済的な問題が解決しなければ難しいと思います。(20歳・男)
- ・普段子供を持つことについてはあまり真剣に考えたことがなかったので深く考えるには良